

「日本画家坂口麻沙子のデッサン・エスキース等のアーカイブ作成とその検証」についての報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学美術学部 公開日: 2022-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 谷内, 春子 メールアドレス: 所属:
URL	https://kcua.repo.nii.ac.jp/records/392

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



「日本画家坂口麻沙子のデッサン・エスキース等のアーカイブ作成とその検証」についての報告

Report on “Archiving and Verification of Drawings and Esquisse by the Japanese Painter Masako Sakaguchi”

Haruko Taniuchi 谷内 春子

1、はじめに

画家にとって、デッサンやエスキースといった資料は、本来人に見せるためのものとは言えないことがほとんどだが、他者にとってみれば、絵画上の実験的な取り組みを読む解くことができる重要な資料となりうるものである。今回坂口氏のご親族のご好意から、「日本画家坂口麻沙子のデッサン・エスキース等のアーカイブ作成とその検証」と題した研究を実施することになった。秋野不矩と同時期に活躍した坂口麻沙子の作品を整理・調査することで、現在はほとんど無名の画家である坂口麻沙子の詳細について明らかにし、戦後日本画—とりわけ創画会での絵画性を重んじ制作されたもの—を紐解き、教材としての利用を試みるというものである。

本稿は、今年度の本学特別研究助成に採択された坂口麻沙子の資料のアーカイブ作業および検証授業についての報告である。

2、研究の目的

坂口麻沙子（1924–2014）は木村斯光（1895–1976、京都市立絵画専門学校卒）に師事し、1977年に創画会会員となった人物である。現在は無名に近い画家であるが、一方で、1942年大阪市展で受賞（当時18歳）、同時期に女流画家作品展覧会に作品出品するなど、当時まだ珍しい女流画家として、早くから評価されてきた人物である。

坂口の代表的な作品は、創画会賞を連続受賞した家族図や晩年の舞妓を描いた人物画であるが、菊池契月の系譜である木村斯光に師事していた時期はその系譜を示すような画風の人物画を描いていたものの、新制作協会日本画部（のちの創画会）に作品を出品しはじめた頃（1972年頃）にはその画面は一変し、人物表現に混沌とした気

迫のようなものが現れ、一見荒々しい絵具のタッチが特徴的な画面を構築している。これらの作品群は、まさに戦後の日本画の一つの動向を示す資料として位置付けられ、小嶋悠司などにも繋がるような、モチーフを画面上で再構築する絵画性に迫るものでもあるといえるだろう。残された膨大な資料を調査分類し、そのいわば作品制作のプロセスをアーカイブ化することは、この時代の日本画が求めた造形性について検証する一つの資料群となると考えられた。

また、これらの調査作業を学生たちとともに行うことで、画家の生の制作のエネルギーを体感できることは、教育的にも多くの刺激を与えられるのではと考えたことも本研究の動機の一つである。

そこで、これらのアーカイブ化とその検証作業は、学生とともにいき、検証については、学生個人個人に投げかけることで、自らの行っている日本画制作のルーツを探ることを想定し、今後の日本画制作を念頭に、写生観や制作プロセスについて検証することにもなるのではないかと期待できたため、授業の中で取り上げることにした。

つまり、まだあまり踏み込んだ調査のされていない昭和・平成の近代日本画の検証材料として坂口麻沙子の作品群を位置付け、「日本画」の中で絵画の成立という名の下に何を目指してきたのかを検証しうる教材として利用することを考えたのである。

3、研究計画概要

坂口のアトリエや倉庫には、大きな日本画作品（以下ダブロー）をはじめ数多くのデッサン、エスキース、作品制作上の写真資料なども数多く残されている。大作を中心としたダブローの制作年代やタイトル、出品歴の調

査、写真撮影は、ご遺族等の手によってほとんど終了していることから、未整理のデッサンやエスキースを整理しアーカイブ化を行うこととした。

調査内容と時期については大きく分けて以下の2点である。

1) 内容：デッサン等の写真撮影、採寸、画材の推定、制作年代（わかるものについて）を、それぞれ通し番号をつけて整理しアーカイブ化する。

時期：調査協力してもらう学生を募り、夏休み期間中に集中的に行う。場所は学内で実施する。

2) 内容：画像や実見をもとに、作品群を検証する。

時期：後期の修士ゼミの中で、授業の一環として検証を行う。

4、実施内容について

(対象学生：大学院生9名)

■前期

・7月上旬から中旬

複数回にわたり、筆者が坂口麻沙子のアトリエを訪問し、分類チャートに基づいた資料の仕分け、デッサンの制作年代の推定、分類をあらかじめ行う。

・7月18日

学生を連れて坂口麻沙子のアトリエ訪問。
坂口麻沙子のご長男に作品について解説を受け、またタブローを中心に作品を見せていただく。

■夏休み

・8月から9月

資料の撮影・調書作成。

デジタルアーカイブ作成を行う。

(エスキースなど568枚、デッサン2129枚、資料285枚、合計2982枚撮影)



■後期・特殊演習の授業としての検証

・10月18日、25日

坂口麻沙子の作品群の解釈についてのワークショップ。ブレインストーミングを通してテーマを整理する。

・11月3日

目的・方法でグループ分けを行う。

・11月7日

坂口麻沙子アトリエ再訪。

・11月8日—26日

学生の検証の足掛かりとなるよう、1985年から89年までの日記帳一冊を筆者が活字化する。

・11月26日

グループでの検証について中間報告①

・12月3日

グループでの検証について中間報告②

・12月13日

個人での検証内容について最終発表。



5、検証の方法と内容について

ブレインストーミングを通して、「造形を考える」「生活と制作」「日本画」について考える」というキーワードがあることを確認する。さまざまな切り口はあるものの先の2つのテーマが相互に関連し合い、「日本画」を考える」というテーマに着地する内容の検証課題となりうることがわかった。そこで、まずは互いに共通する内容も多いことからグループでデータを集め、その後、各自の検証の着地点を模索するという内容で授業を進める。

学生が行った検証内容について、具体的には次のようなものとなった。「筆致の造形的意味についての分析」、「絵具の使用法と空間表現の相互関係について」、「構図や描かれている謎の物体の意味」「東洋的な空間構成に対する西洋画受容について」など、学生自身の課題点と関連させながら坂口氏の制作の基点となる部分について読み解くものや、同時代の作品との比較のために、造形要素（色彩や明度、彩度、構図、モチーフの数など）を数値化してグラフを作成し「日本画」を考えるという試みも見られた。このグラフ作成には数値化の基準が曖昧になるリスクはあるものの、山型やウサギ型といった分布の形に特徴が表れていく興味深いグラフが作成された。ただ、この特徴をどのように読み解くかによって何が導き出されるのか慎重に理解する必要があるように思われた。本稿執筆時点では、まだ結論に至っていないが、この検証の成果が、いわゆる自明の「日本画」分析ではなく、坂

口麻沙子の作品のある種の特異性が一つのヒントとなり、また学生自身の制作上の問題意識と絡み合うことで、独自の日本画についての解釈が得られることを期待している。

6、結びにかえて

坂口麻沙子の作品は、色彩豊かで、筆致は一見荒々しい特徴を持ち、また構図は構築感があり強固なものとして見える一方、何が描かれているのかわからない箇所、気に入ったものは何でも取り入れる純真無垢な制作姿勢などが渾然一体となった、大変魅力的な作品といえる。そしてさまざまな問いを私たちに向けてくれているように思われる。今回の研究活動を通して、そのような作品制作の土台ともいえるべき膨大な資料群から制作について読み解くことは、筆者にとっても、学生にとっても、描くということそのものに立ち返り、大学での日本画教育を顧みることでもあったかもしれない。

最後に、学生たちが追いかけた検証のテーマ「日本画」を考える」ことは、自分たちの立ち位置を辿る旅でもある。未だ途上ではあるが、今回の研究活動はその旅の一つの道標となるような資料の開拓と活用の実践といえるものだったのではないだろうか。今後、丁寧な資料の分析や活用についてなど課題も多いものの、今回資料の存在を明らかにしたことで、さまざまな活用の可能性を示すことができたという意味において、興味深い成果が得られたとしておきたい。

